

□ 花葉会賞受賞者紹介

米どころで花作りに励む丹後英彦氏

小澤 勇

丹後英彦氏の略歴

昭和11年9月11日	新潟県北蒲原郡中条町（現胎内市本郷町）に生まれる
34年3月	千葉大学園芸学部卒業
35年	中条町役場勤務
42年	中条町役場退職 自営
43年	丹後花園設立
平成元年	中条町農協組合長就任
10年	同 退任



広大な緑の稲作の地で、30歳で町役場を退職し、念願の草花栽培を始めた。シクラメンを主に、草花を相手にした。まだ販売ルートがなく、車で小売りをし、頑張られた。

5年後、新しい花木の分野としてシャクナゲに目を向け、その苗作りに転換していった。旧来の産地は情報も苗も一切外部に出しておらず、新規参入者は種子や親木のたぐいは野外採種の海外からのものに頼らざるを得ない状態であった。だが、参入グループ内では情報や各自が経験した技術を公開しあって向上に努め、みんなの力で生産拡大にもっていったという。

その後シャクナゲ品種を大きく盛り上げた‘ルーズベルト’も入ってきた。門外不出であった接木技術が少しずつ普及し始めていった。またその後、イギリスでのヤクシマ交配種を知り、年々導入、接木による増殖に励みをつけていったようである。外国からのものは挿し木によるもので、2～3年で根腐れして枯れてしまった。後に開発された台湾シャクナゲの強健種（耐暑性）である赤系シャクナゲが台木として用いるようになり、夏枯れの心配は回避され、蕾つきのシャクナゲ生産が急速に増加。花の万博の頃にはシャクナゲブームといわれるほど盛んになっていた。

シャクナゲの世界状況や新品種など、諸事情を同級の前田氏、先輩の平野氏にご指導をいただき、同窓を通じ

ての人のつながりのありがたさを大きく感じておられる。

シャクナゲのおかげでイギリス、ドイツ、ニュージーランドのナーセリーを視察することができたという。それを通して日本で多種のシャクナゲ品種を「シャクナゲ写真集」（誠文堂新光社）として紹介している。

この頃、ご息子がアメリカでの研修を終え、一緒に始めている。そんな折、要請があつて協同組合の理事に、後、組合長として就任された。組合長時代は食管理制度の廃止があり、稲作専業農家にも園芸を取り入れた複合経営を勧め、そのために施設（予冷・保冷库、出荷場等）の必要性を強調し、進められた。シャクナゲは以前ほど人気がなくなり、転換を含めて方向づけの必要性を感じ、3期で退任。そしてオーストラリアの植物に向かつていった。

最初は西オーストラリアのナーセリーを回り、いろいろ買い集めた。後で調べると大半が東オーストラリアカビクトリア州の原生種が多かった。西オーストラリアの植物は多湿気候の日本では難しいものが多いように思われた。

次はシドニー、メルボルンを主にナーセリーを訪ねた。原生種専門のところもある。5年にわたって導入した主なものは、ボロニア、ブラキカム、コーレア、クロウエア、ダンピエラ、エバククス、ハーデンベルギア、プロスタンセラ（ミントブッシュ）等々だが、実用性のあるものは4～5種類である。

これまでに数回オーストラリアへ行って感じたことは、草生の植物はだいたい改良が進み栽培に適したものが多くなったこと。だが花木のほうはあまり進んでいないように見受けられること。だが野生種で観賞価値のある地域としては特異で、改良され、園芸化が進めば、オーストラリア植物のブームがくるのではないかと夢を見ているようである。

今流行のクリスマスローズは地域ぐるみで、毎年新花を楽しんでおられる。また、クレマチスにも手を出し、相変わらず夢を食べているようである。

小さな生産者育種、導入試作を通して「楽しむ」を軸足として、地域の目線とともに歩み、後継者育成にご尽力されている。なお、戸定会では新潟の支部長をされている。

□ 花葉会賞受賞者紹介

花卉園芸一筋、人生設計通りの素晴らしい生き方

神奈川県立フラワーセンター・大船植物園、34年間勤務— 木崎 信男 氏

熱 田 健

木崎氏は昭和12年、東京生まれ。都立西高を経て松戸を36年に卒業。私とは稲毛の教養課程時にあった、徒歩旅行部(ワンダーフォーゲルの方が通りが良い)と云うクラブ活動を通してのお付き合いです。と云っても3年遅れの私にとっては、正に雲の上の人的な存在。それでも何度か山行を共にしていただきました。

さて、ここに今回の受賞に当たって、氏が書かれた「我が花の人生」と云う小文がありますので、一部を紹介させていただきます。

『両親共埼玉の山の中育ち、そのためか庭でいろいろなものを栽培することが好きで、庭には大きなかぼちゃなどがなっていたりした。そんな環境とその後の「疎開」で母方の実家に行ったため、尚更自然の中で育ったことが大きな影響を与えたものと思います。終戦後東京に戻りましたが、矢張り狭い空き地で、小学生の頃から花を育てていました。

中高校の頃、私なりの人生の設計をし、それに沿って生きてきました。その根幹は、花を作る現場で生き、且つ安定を得ようという、まあ余り大きなものではありません。それには公務員が一番と考えていました(多分、県レベルの花の研究機関などを考えていたように思います)。

松戸を出るとき大船に「花の植物園」が出来ると聞いて、早速応募。農水省の一種で北海道の試験場にどうだとの打診も断り、大船に決めました(昭和36年卒です)。

開園前からの参画で、以後34年間大船に居りました。その間、幾たびもの移動打診も断り、居続けていましたが、「此处に居続ける者を所長にはしない」と云うルール? と、そんな古狸がいては他所から所長を連れてくるのが難しいと言う理由から、ついに最後の3年は肥飼料検査所に転勤させられ、植物園から離れました。

定年後は公園協会で園芸相談員をする傍ら、ある会社が派遣する、園芸講師の「養成」にも携わり、現在も講師養成を続けて携わっています。

我が人生は花を中心とした設計通りに過ごして行くことが出来、花に感謝の現在です。』

これを読むだけで、花一筋に精進してこられた氏のプロフィールはおおよそお解りでしょう。植物園在職中は運営の企画、園芸相談の対応、相談員の育成から植物の栽培と施設の管理等あらゆる現場での実際の活動を惜しみなくされていました。

氏はやはりバラがお好きだそうで、自分でプランニングしたバラ園の管理は剪定作業を始め、殆ど一人でなさ

たようです。そして閉園後の夕方、トワイライトに映えるバラの特別な美しさを独り占めして楽しんでいました。「バラは数年も心血をそそいでやると、向こうから挨拶をしますよ」と、嬉しそうに語られます。

また季節の企画のキクの展示では、数十人の作家の作品が鉢を見ただけでほぼ見分けられたそうです。

施設の面では、温室内の空気は絶えず動いてなければならぬという持論を実践すべく、従来の頂部の蝶番による開閉窓は換気能力に限界があり、さらに効率をよくする為にスライド式のベンチレーターを提案してよい結果を得ているといえます。

このようなエピソードは沢山あり、とても書ききれません。更には執筆の方も精力的になされ、出版社との繋がりがりもできていたのですが、目立ち始めると「公務員の兼業は望ましくない」等の批判? が出始めたので、その後は控えたそうです。それでも幾つかの出版物があります。

池田書店から清水基夫氏との共著で『観葉植物』。誠文堂新光社のガーデンライフシリーズ『一、二年草』、『宿根草』を19名の共著で執筆。世界文化社『庭で育てる茶花の図鑑 風焔編』を岡部誠氏との共著で出版。この他雑誌のコラムや寄稿は数え切れない程だそうです。

思いつくままに木崎氏の紹介文を書きましたが、肝心な何かが書けていないような気がします。静かですが、とにかく凄い人です。極端に表に出たがらない、目立つ事を避ける性格のために受賞が遅れたのだと思います。が、氏の花卉園芸界に及ぼした影響、成果は、計り知れないほど大きなものであったと信じています。



温室の窓。屋根は片流れになっていて、一番高いところに窓が開くようになっている。一番低い位置にも窓があり、入った空気は上に上がって屋根に添って流れ一番高いところから出て行く。空気の流れが良く、高温に成りにくいような設計にしようと考えた

□ 花葉会賞受賞者紹介

計画を持ち実行する人 村川文彦さん

村 井 千 里

村川文彦さんを推薦した私だが、あまり深くおつきあいをしたことはない。ただ、埼玉県の実験場研究員と農高の先生という関係で、その人となりは花卉生産農家を通して存じ上げていた。

私が生産の問題点を聴き取りに入った川里、鴻巣、深谷、見玉地方の花卉生産農家の経営主やご子息が村川先生の薫陶を受けた人々であったからである。

埼玉県戸定会支部の理事会や総会で親交を重ね、現在はテクノホルティ園芸専門学校での片腕になっていた。だき、「花を作る」「花をより美しく、刹那の一時を飾る」という教育に取り組んでいる。

このことを通し、実践の人、村川さんをよく知ることができ、推薦に誤りなしと自信をもって紹介できる喜びを味わっている。

なにしろ、どぶ川に入って土手の除草を実践してしまう先生には、現代気質の学生達を無言のうちに勤勉の意識を植えつけられてか、まったく素直に実習に励んでいる。お陰さまで、私の方は細かな種子の育苗に、温室管理に専念でき、徐々に、「本当に生産を学ぶ」という、古臭くても現代に重要な農学校を推進できるだろうと、後期高齢者が幸期高齢者として活動する意欲をもらっている。

なにしろ、学校周辺(といっても半径20km)の著名な花卉農家は村川さんの教え子であるし、私が昔、直接技術の交換を重ねてきた人々であるからだ。

野球と農業プロジェクト発表にかける

千葉大学野球部に在籍し、高校で野球部の顧問という実績で、クラブ活動にも力を入れながら、全国の農業高校のプロジェクト・コンテストに力を注ぎ、県代表、関東代表、全国優勝と若き生徒に刺激を与えてきた。この成果が農高生を文学教授に育て、全国屈指の花卉生産農家として成長させている。

英語を学ぶことは花卉園芸の基本

村川さんに正すと笑っているが、教え子たちの中には伝説のこととして知られ、それに刺激され実行した人

もいる。

「英語の辞書を食べた」と、英語の担当でない村川先生の一言に、英語に力を入れ、負けじと辞書を食べたという方に出会った。何事にも研究熱心で、ゴールドクレストの苗作りでは一番、ポットガーベラの育種でオリジナルな生産組織を作り出している。

辞書を全部食べたかは聞き損なったが、ヨーロッパ視察に同行したが、積極的に質問したりして何かを掴み取っていかうとする意欲十分な意気込みが見られた。

ここにも実行力の威力と、それに感化する生徒の意気、まさにこれが教育であろう。

平成11年より、母校の「農業科教育法」の非常勤講師となったが、当を得たもので、実践力を学ぶ講師としては、他に類を見まい。

急激に変わった花卉園芸教科への対応

農業教諭になって3年目には、埼玉県「園芸学科」新設のための設置委員会の重責を担う。その後、高校教育の多くの分野での委員を歴任して、羽生実業高校に「実業経済科」を全国に先がけて設置し、科長・農場長の要職に。その間に、草花園芸の指導内容に対応した実践を行い、「施設園芸」「草花」の教科書及び指導要領の鉢花部門を担当執筆した。

県内3農高の教頭を経て、杉戸農業高校を3年間勤めて勇退された。

読書する人

読書家として知られ、教員採用試験には愛読書はどう答えるかを検討しておられたほど。中島敦の作品や奥の細道は、目で読むほかに、テープで聞き、多くの作品をそらんじている。このような文学的な素養は、単に農業技術の指導の中でも、滋味として働き、講義の内容を深めている。

とくに、ふかやのオープンガーデンの指導には、人々と深いかわりを持つ上でも、読書の幅広さが役立っているのではと思っている。